

長崎大リレー講座・要旨 ①

世界の構造変化一段と

舟橋聖一さんの作品に幕末の大名、井伊直弼を取り上げた『花の生涯』がある。高校1年生のとき、NHKの大河ドラマでこの作品に触れ「おやっ」と思われた。まず、安政の大獄を行い、希代の悪役として描かれることの多い人物に「花の生涯」というタイトルをぶつけたイマジネーションに驚いた。同時に、その後の日本を考えると、開国近代化という時代の扉を開いた功労者でもある井伊直弼に単純な評価はできないという考えが心のなかに宿った。「自分の頭で考えることが大事だ」とうつつすと気づかせてくれた作品だ

激動の2011年をどう総括するか

日本総合研究所理事長

寺島 実郎氏 (寄稿)

3月11日、東日本大震災に襲われた日本人にとり、今ほど時代認識が問われていることはないだろう。しかし、激流にもみつぶされるなかで平衡感覚を保つことは難しいし、的確な時代認識をもつことは容易ではない。日本人は今、全員が内向きになり、目を外に向けて余裕がない状況で生きている。一方で、世界の構造変化は一段と深まっている。冷戦の終焉(しゅうえん)から20年、2001年の9・11のテロから10年を経て、世界における米国のプレゼンスは大きく変わった。90年代初めに社会主義が自壊し、米国は唯一の超大国として世界に君臨した。それからわずか10年で、米国は9・11に襲われ、アフガン、イラクでの戦いに突っ込んでいった。1兆3千億の直接軍費を使い、6200人もの若者を死なせたにもかかわらず得たものは何もない。むしろ、岩盤のように固った中東における米国の影響力と存在感は急速になえ、ペルシャ湾の北側に巨大なシリア派のゾーンをつくって中東から去ることになった。昨年未からの「アラブの春」と呼ばれる動きもその文脈で考えると腑(ふ)に落ちる。その米国は今、「シェールガス革命」と呼ばれる、1859年にペンシルベニア州で油田が発見されて以来の妙な高揚感に包まれている。東日本大震災後、原子力推進論者の旗色が悪くなったのは米国も同じだが、巨大な投資にもかかわらず雇用を生まなかった再生可能エネルギーに対する期待も急速に後退している。脱原発II再生可能エネルギーという単純な構図ではなく、世界は今、シェールガスを中心に回り始めている。冷戦の終焉後の世界秩序が20年間で大きく振れたように、世の中はものすごい勢いで変化する。固定観念にとらわれず、柔軟に考えることの大切さは幕末も今も変わらない。